「障がい者支援」と「動物福祉」が使命。人と動物が共存できるまちづくりに取り組む

厚生労働省関東信越厚生局長所管　厚生労働大臣指定法人
（福）日本聴導犬協会　発行

# Pro-Dog School　（愛犬家教室）

## ●コース 1:基本のしつけ●

## 自分で考える犬に育てる

〒399-4301　長野県上伊那郡宮田村 7030-1
TEL:0265-85-4615＆5290　　FAX 専用:0265-85-5088
E-mail:in：inf@hearingdog.or.jp　http://www.hearingdog.or.jp

●

無断転用:転載禁止　ⓒ文:有馬もと: (福)日本聴導犬協会会長/　ADI（国際アシスタンス･ドッグ協会）元理事/　ADI 国際認定　聴導犬・介助犬インストラクター/　英国聴導犬協会　国際認定聴導犬インストラクター
ⓒイラスト:EMIKO

・はじめに、人間の最良の友を得るために……１

（１） 犬の祖先はオオカミか？ ……1

（２）犬の IQ は人間より低い？……２

（３）犬を飼う上で、気をつけなくてはならない点…４

（４）犬を喜ばせるファン・トレーニング……６

ファン・トレーニング(FT)って何？……６

迷信が生んだ力の訓練方法と、FT の違い……８

（５）早期の訓練:パピークラスの目的と意義……９

一番初めに教えたい Come (来い)と Sit (座れ) ……10

Down (伏せ)のポイント……13

Wait (待て)のポイント……14

Heel(つけ)のポイント……16

（６）子犬のための社会化って何？……17

（７）子犬の社会化での注意点 ……19

メモ



# ●はじめに

## 人間の最良の友を得るために

**「3 年間幸せになるためには、結婚すればいい。10 年間幸せになるためには、犬を飼えばいい」。うる覚えで、ちょっと年数的には違うかもしれませんが、英国の本にこんな言葉があるのを見つけました。当時の犬の寿命は長くて 10 年くらいだったでしょう。妻や夫との熱い情熱は持つのは 3 年くらいだとしても、犬とはその命がつきるまで愛情を保っていられる。英国人らしいアイロニーのこもった内容ですが、愛犬家にはうなづける言葉かもしれません。**

さて、ここから人間が愛してきた「犬」というものを知るために、「犬」についてお話をしましょう。

### ■□■　（1）　犬の祖先はオオカミか？　■□■

ノーベル受賞者のコンラート・ローレンツ(動物行動学者。オーストリア人　1903～1989)は、彼の著書「人イヌにあう」の中で、ジャッカルが犬の祖先であり、ジャッカルが人の群の側に近づき、人間にとって初めての家畜となったと説いています。しかし、後に続く学者たちによって「犬の祖先はオオカミである」と主張され、ヒトとイヌが出会ったのも、２万年前とも３万年前とも諸説入り乱れるようになりました。1960 年代には、ドイツのヘル博士は「近代生物学的」な遺伝子検査によって、犬の祖先は「オオカミ」であると断定。しかし現在、欧米の学者の中には、あまりに多種多様な犬の姿形や、性格の違いから「野生犬同士だったり、ジャッカルであったり、オオカミであったり、その時、その地域で交配が行われ、それらの犬の祖先たちが人間とともに他の地に渡り、そこでその土地にいる犬科の動物と交配していった結果が、今の犬種である」といった観点を述べています。

これらの仮説も新たな発見や時代と共に変わり、人類学や様々な考古学的所見から、当時の原始人であったヒトとイヌとが出会ったのは、3 万年くらい前で、当時のイヌは狼でもジャッカルでもなく、すでに今の「犬」のような姿形をしていたのではないかと言われています。しかし、オオカミであったとしても、ジャッカルであったとしても、「犬科」の動物は「パックド・アニマル」（群で生きる動物）であることが、同じように群で生きる動物である人間と、共に生きられる特性を受け継いだといってもいいでしょう。

## ■□■　（２）犬の IQ は人間より低い？　■□■

**犬の知能は人間の５歳くらいだという学者がいます。しかし、人間のために創られた IQ テストでは測りしれない能力を持っているはずです。犬たちは、人間の言葉の意図を理解し、その命令によって行動します。記憶力も良く、新しいことを考え出すこともできます。犬たちにとってそれらの思考力は、子犬時代の日常的な遊びから身につけていくといわれています。遊びは大事です。**

**①　犬の知能を伸ばすには：**

犬は、子犬時代に犬同士や人間の家族と遊ぶことによって知能を高めていきます。散歩は勿論ですが、仲間との遊びは子犬の成長にとってとても大事な過程なのです。家の中で、家族が一緒に、かくれんぼや子犬の好きな物を隠すといったゲームを楽しみましょう。ゲームという家族とのかかわりを通じて、子犬たちはその家族のルールや人間と生きる環境を知っていくことになります。こういった楽しい脳への刺激が、思考力を伸ばすことにつながります。子犬の集中力は長くは続きません。１日に３分～15 分以内がベストです。

**②　IQ では測りしれない人間を超える能力：**

●**嗅覚**：犬の鼻腔（鼻の穴）は、大きく、複雑なしわがたくさんあります。そのため、より多くの空気にふれられるようになっています。しわを伸ばした面積は、人間の３０倍にもなるといわれています。さまざまに繰り返された犬の嗅覚実験によると１千万分の１に薄めた酢酸や硫酸。100 万分の１に薄めた塩酸や乳酸を正確にかぎわけることができるそうです。ちょっと想像もつかない数値で、実感としてつかめませんが、ある実験では、匂いの種類によっては、人間の 100 倍とも 100 万倍とも言われています。５００メートル先の風上の匂いをもかぎわけられるすばらしい嗅覚の持ち主です。

●**聴覚**：周波数によっては、人間の３千～５千倍といわれます。特に人間の耳では聞き取れない超音波をキャッチすることができます。騒音の中でも、飼い主の足音を聞き分けたり、アンテナのように耳を動かして、音の方向に合わせて、より大きく聞き取るといったこともできます。耳を動かす筋肉は、人間の２倍以上もあるといわれています。



みなさまにいつも思い出していただきたいのは、常に飼い主さんが犬のリーダー（日本聴導犬協会では母犬）でなくてはならないということです。そして、子犬は犬の群れから離されたばかりで、なかなか人間の言葉は通じないということです。では、ここでおさらいです。

**①　言葉よりも、みなさんの動作に注目させてください**

例えば「すわれ」の言葉を何回も繰返すよりも、手を犬の鼻先から頭にかけて動かしたり、すでに「すわれ」の手での命令がわかる子には、犬の目と自分の目が合ったときに、手だけで命じてみてください。大事なのは、目と目が合った時に笑顔で子犬にやさしく命じること。言葉がわからない子犬たちが、わかるまで待つということです。

**②　言葉と同時に、犬笛や手をたたくことで「来る」をおしえる**

大きな声やはっきりとした声を出せない聴覚障害やお年を召した方もいらっしゃいます。家の中で犬を「呼ぶ」時には声と同時に、犬笛や手をたたいた音に敏感に反応するようにしておくと便利です。

特に、遠くに逃げてしまった場合などは、犬笛の音が役にたちます。家の中で「来い」をおしえる時は、犬のご飯時間を利用しましょう。そのときには、１食分のご飯を２つに分かて、２人で持ち、離れて笛をふいて、犬がきたら、一口上げ、また違う人が呼んで来たら、ご飯を上げます。同じことを２～３回繰り返したのちに全部のご飯をあげましょう。このような形で、家の中で「来い」を教えてください。

**③　目を合わせることが最優先**

盲導犬の場合は、ユーザーさんが視覚障害のため、目を合わすことができません。ですので、声による命令になります。

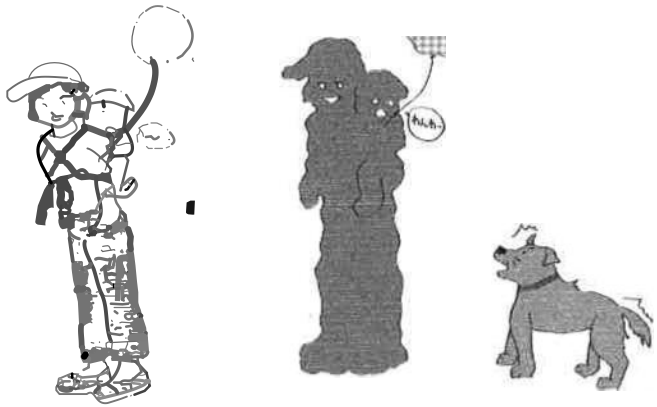
聴導犬や一般犬の場合は、できる限り、何かの命令をする際には、犬の目が合った時にしましょう。

たとえば、犬の名前を呼んで、目が合うだけでも、ごほうびを上げてくださっても構いません。犬がいつも飼い主の目を見るように習慣づけると、飼い主さんと愛犬との絆ができやすくなります。

目を合わせることは、心を通じさせるために必要なことなのです。

飼い主さんがよくおこなってしまうのは、怖がる子を胸に抱っこしてしまうことです。抱くと高くなり、視野が広がります。また、子犬の自主的な行動の妨げとなります。子犬を抱き上げずに、飼い主の足の間にいれておくのは、怖くて犬が逃げ込みたい時は、飼い主の足の間に逃げ込めます。逆に、自由に何かをチェックしたい時は、子犬は自分から外に向かって出て行けるからです。その子が、怖がらずに、紹介された物に近づこうとしたら、「いい子」と誉めて、ごほうびを与えてください。好奇心を満たすことで、知能も高まるはずです。

環境の変化に対して強い子に対しては、飼い主さんは椅子に座ってリードを握っていてください。もしも、愛犬が吠え掛かろうとしたら、「オフ」といって、リードを引いてください。「シット」で、おとなしく座ったら、ごほうびをあげてください。



※社会化の注意点①：ﾀｲﾐﾝｸﾞが大事です。紹介された物に対して、きちんと座って受け入れられた時に、初めてごほうびをあげます。吠えていたり、怖がっている時には、与えないでください。

※社会化の注意点②：ごほうびが大事です。
掃除機や自転車などの金属質の動くものは、犬にとっては苦手なひとつです。まずは、動かさないで、掃除機や自転車の上にごほうびを置いて、犬が進んで探れる機会を作ってあげましょう。動かない間、子犬たちは臭いをかいだり、触れたりして「なんだ、怖い物じゃないや」と思えれば子犬も平気なものが増えるはずです。



**●視力**：犬が人間にまさるひとつの部分は、動くものをとらえられる「動体視力」です。静止視力において犬は、人間でいえば近視で、その上に、色弱だといわれています。人間が４色カラーで見ている風景も、赤と緑の識別ができない犬には、うっすらと色のモノクロに映っているといわれています。鳥では人間には見えない紫外線まで見え、20 色を見分けられるといわれ、特に木の実を探さなくてはならない鳥は「赤」には敏感と言われます。犬はうまく識別ができない「赤」は「ぼやけたグレー」に見えるといわれています。このように、色の区別がつきにくく、近い物が見えにくいという欠点から①赤ちゃんを背負ったおばあさんに吠え掛かったり、②ランドセルを背負ってカッパを着た小学生を追いかけるのは、すべてが一体になってしまうからです。

① は、赤ちゃんとおばあさんの２つ頭のある生き物に見え、②は、背中にコブのある不気味な怪獣にしか見えないのです。全体的に色合いが似ているものを着ている場合は、犬の視野の中で、一体化してしまうと、理解してあげてください。逆に、遠くにあっても、動きのある物に関しては、犬の方が人よりも早く捕えることができます。このように色や形の識別能力は、全体的に人間よりも劣ったとしても、キャッチできる視野の範囲は、なんと 250～290 度という広範囲なのです。さらにもともと夜行性のため、薄暗いところでも物の判断能力を持っています。

**●脚力**：ドッグレースに使われるグレイハウンドでは、トップスピードで時速 70 キロを出すそうです。オオカミ狩りに使われたボルソイのは時速 60 キロまで出せるとか。犬の進化の経過の中で、オオカミにちかい姿を残す犬種ほどその脚力を誇るといっていいでしょう。反対に、シーズーやパグなどは、走る競争では勝ち目はありません。何万年もの人間に期待された仕事内容によってその姿形や能力は異なり、脚力、臭覚、聴覚なども、各々犬種ごとで異なるといっていいでしょう。

**●顎の力**：新築マンションにゴールデン・リトリーバ(GR)を飼った夫婦が引越し、愛犬を残して買い物に行った夫婦が帰って大騒ぎ。リビングと寝室の間の敷居が抜き取られバラバラになり、散乱していました。一人っきりで見知らぬ家に残された GR は、ストレスで手近な敷居に目をつけ床からむしりとって、噛み砕き、うさをはらしてしまったのです。祖先が持っていた獲物の肉を食い破り、骨をかみ砕く力は今でも犬たちの中に残ります。噛む力※は人で 58 kg、犬で 149 kg。狼で 184 kg。「噛む」行為は犬にとって不可欠です。硬い骨やナイラボーンなどを常に与えてあげないと家自体が、犬の顎の犠牲にもなるかもしれません。※Dangerous Encounter with Brady Barr(National Geographic Channel)調べ

## ■□■　（３）犬を飼う上で、気をつける点　■□■

**●犬なりの栄養を与えましょう**

昔は、味噌汁に残りご飯だった犬の食事。やはり、今よりも寿命は短かったようです。悪いのは、塩分や食べさせてはならないネギが入った物や足りないタンパク質、ビタミン、カルシウム。数え上げたら切りがありません。

人間と暮らし始めた犬と猫ですが、雑食の犬と肉食の猫でも食事は違います。たとえば、猫はまだ生暖かいようなネズミの血からビタミンやミネラル、肉から新鮮なタンパク質といったように、必要な栄養素を吸収しています。野生犬は、肉も食べていますが、果物や芋、餌のない冬には木の皮や根まで食糧にするそうです。ペットフードが簡単に入手できるようになった現在、犬の寿命と体力は飛躍的に延びました。フードの中には、必須のビタミンやミネラルがバランスよく含まれているからです。残り物ばかり食べさせられている偏食犬も勿論、問題ですが、愛犬家だからこそ気をつけなくてはならないのが、人間と同じように、肥満、糖尿病や腎臓病、高血圧、心臓病といった成人病の犬が増えていることです。本当の愛情は、犬がほしがるからといって、ほしい物を与えて「甘やかすこと」ではなく「バランス良い栄養で健康を保たせ、精神的、肉体的にふさわしい刺激を与える」ことです。

**●「大事なのは、早期のしつけとタイミング」**

犬たちが本能的に行っていることで、人間社会では問題になったり、「いやだ～」と嫌悪感を抱くものがいくつかあります。

例を出せばキリがありませんが、甘がみ、吠え、あちこちにおしっこをかけるなど、などです。乳歯の生えるくらいの頃は、甘がみはそんなに痛くないので問題にもなりませんが、飼い主が子犬にかむことを許しているうちに、歯は大きく発達し、顎の力も強くなって、口も手を丸ごとくわえられるくらい大きくなってきます。

犬にとっては、「ハグ、ハグ。歯がかゆいから、ママの手でもかんじゃお～」とか「遊ぼうよ～」というような軽～い気持ちなのに、人間の手から血が出るくらいに強く当たってしまったり、スカートが破けてしまったりといったことにもつながります。少しでも若いうちに直す方が得策です。



の側につけるのではなく、飼い主の横にきちんとついて歩くことが「いいこと」とわからせなくてはなりません。

愛犬が飼い主さんが望むポジションにきた時は、左手に握ったごほうびを与えましょう。そのタイミングを忘れずに。

※「つけ」の注意点②:「つけ」の命令で集中力を増させるためには、リードを握る側の太もものあたりを手で軽く音を立てながら歩いたり「つけ（Heel)」と声をかけながら歩くと良いでしょう。特に外では、犬にとって魅力的なものがいっぱいです。犬の注意を引くためには、ごほうびやおもちゃを使う　のもいいでしょう。

## ■□■　（６）子犬のための「社会化」って何？　■□■

「社会化」。なんだか難しい言葉ですが、実は、みなさんが毎日過ごしている生活を、子犬たちにもできるだけ早期に良い体験として見せてあげることです。例えば、街を歩いていて工事現場の騒音で驚いて逃げこんだり、横を通りすぎる車を怖がって歩けないとか。来訪した人間や、道で会った他の犬に対して、吠えかかったりする犬は、飼い主には大きな問題になります。

子犬の時に、いろいろな物や場所を良い体験にすり替えていけば、解消できることなのです。例えば、怖がる犬たちに、工事現場の音を「大丈夫。怖くないから」と口で説明してもわかりません。

子犬の怖がる物を「『これ』は、怖くない」と教えるのではなく『これ』の場所でごほうびを与えることで、『これ』＝「ごほうび」にすり換える作業を行っていきます。「ごほうび」は犬にとっては、最もわかりやすい「良いこと」です。子犬が怖がっていた『これ』が「良いこと」に換えられ、平常心の高い犬へと育っていきます。

単純なようですが、まだ何も描かれていない子犬の脳の中に、良いことと悪いことをインプットしていく重要な時期なのです。

人と異なり、犬は弱視で色弱です。特に、赤色はぼやけたグレーに見えると言われています。例えば、子供をおぶったお母さんは、頭がふたつある生き物のように見えるかもしれません。すべてが一体化してお化けか、怪獣のように映っているかもしれないのです。

子犬にとって初めての物を紹介する時は、特に怖がりの子には、初めはしゃがんだ飼い主の足の間に子犬を入れて背後を守ります。

■Heel(ついて歩く):ほとんどの人が、リードをつけてから、一緒に歩くことを犬に教えます。まして、子犬だからといって、初めのうちは、リードをひっぱることを許しています。なんでも吸収する時期の子犬たちの脳の中には。

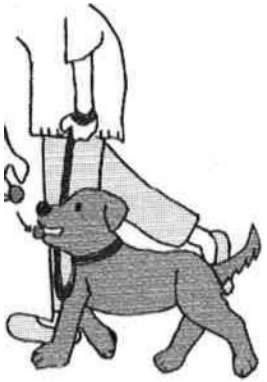
「人と歩く時は、こうやって、ひっぱって歩けばいいんだ」

と、記憶されていくのです。　間違った考えをうえつけないように、子犬が家にきたとたんにHeel（ついて歩く）の仕方は教えたいものです。方法です。リードをつけません。家の中で歩行訓練を始めましょう。　子犬の名前を呼びながら、利き手と反対の手にごほうびを持ち、犬の鼻先にごほうびがいくように人が体をかがめて、歩きます。子犬にとって、初めての場所は安心できないので、ほとんどの子犬は、人の後から離れないようにしてついてきます。

ついてきたら、思いっきり誉めてください。子犬は、人について歩くことが「いいこと」なのだと理解するようになります。

子犬はごほうびがほしくて、みなさんの横をおとなしくついてきます。その位置を守れたら、時々「Heel(つけ)、Good(いい子だねぇ)」といいながら、ごほうびを子犬の口の中に入れて下さい。

①
4



※「つけ」の注意点①：ここで何度もお話ししていますが、無理に人間が力をかけることで子犬にいうことをきかせるのは、子犬にとっては、「オシリを押されれば座ればいいんだ」とか、「前足を引っ張られたら、伏せるんだ」といった、誤った考えになってしまうのです。言葉と動作、そしてご褒美を組み合わせるには、やはり、時間と根気が必要です。Heel（つけ）の時もリードでひっぱって、人



パクパクと口を私たちの手に当ててくる子犬に向かって

「駄目よ。いけないの」

などと叫んでも子犬には通じません。では、どうするかというと、犬語を使ってみましょう。　犬の教育をするのは、本来、群の犬たちです。母犬や、その他の大人犬、そして兄弟犬たち。初めは、子犬のじゃれあいで、加減や上下関係を学んでいきます。遊び中に、相手を強く噛むと、「キャン」といった、甲高く強烈な声を上げます。その瞬間の子犬を見ていると、噛んだ方はちょっとビックリして相手を離しています。大人犬に、無作法に甘がみしたら、先輩犬は「ワン」と強く威嚇し、機嫌の悪い時にはほんのちょっと子犬を噛みます。

こういったことで、子犬たちは犬同士のマナーを学んでいきます。「こうすると、相手は嫌がる」とか、「怒って仕返しにあう」といったことを知り、徐々に、身につけているのです。

ところが、ペットとして売られるために、早期に母犬や兄弟犬から引き離された子犬は、教育される期間がまったくなく人間の家にやってくる子もいます。

言葉も、行動パターンも違う人間と犬が一緒に住むわけですから、親代わりとなった人間の方が、犬にわかりやすい言語を使ってあげるべきでしょう。まず、子犬がハグハグと皆さんの手を口に入れます。

子犬が小さいうちはそんなに痛くはありませんが、その瞬間に、「痛い！」と、少し強めで甲高い声で言ってください。

前にも書きましたが、この時は「痛い」でも「ワン」「たこ焼」でも、どんな言葉も子犬にとってはまったく意味不明です。大事なのは、タイミングと声のトーンです。噛み付いた瞬間に、甲高くちょっと強い声を使ってください。そして、もし子犬が口を離して、躊躇しているようなら、「ワア、賢いね。いい子だね。」と、たぶんみなさんを見上げてボーとしている子犬にごほうびの言葉とおいしいものを上げてください。

これを常に繰り返すだけで、ほとんどの場合は甘がみ癖はなおります。吠えも、オシッコ癖も、できるだけ早く「ノー」とか、「ダメ」とか言葉はみなさんの好きな言葉でいいのですが、その瞬間に、「こっちはおこっているんだぞ」という声のトーンで行うことが大事です。

そして、犬が問題の行動を途中でやめたら、誉めて、ごほうびをあげてください。　子犬たちは、わからないなりに飼い主さんたちにほめてほしくて、がんばっていることをいつも頭の片隅に置いておいてくださいね。

母犬や兄弟犬から早くに離された子犬にとっての、「犬語」は、飼い主である人間が作っていくものです。犬にわからせるためには、いいことをしたら、笑顔で見る。悪いことをしたら、怒った表情をつけることも大事でしょう。「犬語」をたくさん持つ飼い主ならば、人も犬も幸せになれます。

## ■□■（４）犬を喜ばす「ファン・トレーニング」■□■

**命令口調で、飼い主さんの言うことを利かない場合には叩いたり、叱責したりするのは古い訓練方法です。昔の軍用犬などのトレーニングから発した方法です。聴導犬などのアシスタンス・ドッグ（補助犬）には「力に訴える方法」は用いません。犬よりも体力的に非力で、動作が遅い飼い主を仲間として手助けしていくためには、「力や強さ」に訴える方法ではなく、犬が「人を好きで、仲間として助けたい」という自主性を培える方法が不可欠なのです。もしも、気の弱い犬を叩いたり、叱ったりしてしまったら、犬が人を怖がるようになりせっかく訓練したことも無駄になってしまいます。**

では、犬を喜ばせ、飼い主さんも幸せにする「ファン・トレーニング」についてお話ししましょう。

**■ファン・トレーニング（犬を喜ばす方法）つて何？**

ファン・トレーニングの元になったのは、ちょっと学問的になりますが「オペラント条件づけ」という動物が行動する際の動機づけです。この「オペラント条件づけ」は、よく、パブロフの「犬を用いた条件反射」（古典的条件づけ）と混合されますが、ファントレーニングは「動物の学習能力」研究であり、古典的条件づけは、「動物の生理学」に関する研究という違いがあります。
「オペラント条件づけ」は、「古典的条件づけ」を元にして、研究が始められたこともあり、まず、ここで「古典的条件づけ」についてふれましょう。

**・「古典的条件付け」**

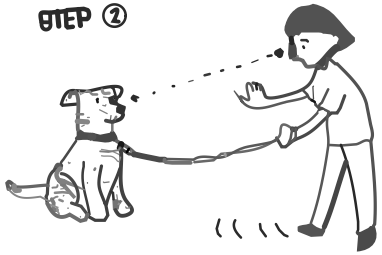
「古典的条件づけ」は、イワン・パブロフ（1849－1936）によって犬を実験動物として用いて研究されました。パブロフは、旧ロシアの生理学者です。当時、パブロフの興味は犬ではなく「消化」機能にあり



その時は「待たせるんだ」という気迫が必要です。初めは、数秒でも、飼い主が側に戻るまでじっと待てたら、いっぱい誉めてあげましょう。
次第に犬からの距離を徐々に離し、同じことを繰り返します。
今度は、犬からまっすぐに距離を取るのではなく、リードを手に持って、「待て。待て」と繰り返しながら犬の周りを回るようにします。それでも、じっとしているようになったら、今度はリードを放して、同じことを繰り返してみましょう。

※「待て」の注意点１：期待しすぎないこと。初めは離れるのは、１歩からにしましょう。生後１年目で、体は大きくなっても、犬はまだ子供と同じです。「すぐにできる」ことを期待せず時間をかけて、愛犬が理解するまで待つてほしいのです。
ですから、離れる距離も１歩からです。
できたと思ってもできなくなったら、元に戻ってやりなおしてください。犬の訓練では「回り道は、近道」です。

一歩



まず、座らせた犬の鼻先から、前足の間あたりにごほうびを下げていきます。犬はごほうびがほしいので、頭を下げる形になります。ごほうびは床にまでついた形なので、それを追って、犬の頭はもっと下がり、食べたいためにペタンと前足全体を床につける姿勢になります。この時に、ごほうびを与えながら、

「down、down」

言葉で繰り返してください。

※「伏せ」の注意点１：ごほうびの位置は、子犬の鼻から前足の間に落としていくように、ごほうびを子犬の前足の位置から離すと、ごほうびを追って子犬がみなさんの手に寄ってしまい、いつまでたっても、伏せの姿勢にになりません。鼻からゆっくりと床の方へ動かしてください。

※「伏せ」の注意点：ごほうびを握るやり方は「すわれ」の時と同様に、親指と人差し指との間にはさんで、子犬に見えやすいようにして行いますが、噛みぐせのある子の場合は、握りこぶしの中に入れて、臭いでつるようにしましょう。ごほうびをあげてはいけないのは、甘がみや前足で飛びついた時です。悪いことをした時に与えてしまうと、そうすればもごほうびがもらえると、犬が思い、逆に悪い癖がついてしまいます。きちんと「伏せ」をするまでは、決してごほうびを与えてはいけません。

次の段階で「伏せ」に「待て」も加えてゆきますが「伏せ」がきちんとできるようになったら子犬同士が遊んでいる時や外でも行ってみましょう。

**●wait(待て)**:「Wait　(待て)」は、どんな時に必要なのでしょう？

例えば、車の中や家の中に子犬がいて、急にお客様が来てドアを開けた時など、大切な愛犬の命を守るためです。

まずは、リードをつないだまま、犬の前に立ちます。手にはご褒美を持っていてください。

座らせた犬から１歩離れ、手で「Ｗａｉｔ(待て)」の合図（犬の鼻先に手の平を出す）をして、じっと犬の目を見つめます。



ました。実験に用いられた犬は、手も足も固定された状態で食べ物を与えられたそうです。1904 年、パブロフは「消化の生理学」によってノーベル賞を授与されましたが、その後、彼の研究テーマは「消化」から「消化の条件づけ」に変えられました。ここで、初めて「条件づけ」が出てくるわけです。パブロフは犬に餌を与える度に、ベルを鳴らしました。犬は、ベルの音と餌をもらえることを組み合わせて学習するにつれて、ベルの音を聞くだけで、餌がもらえると期待してよだれを出すようになりました。

パブロフは「ベルを鳴らす」だけで唾液を分泌させることを、犬が「条件づけ」されたと主張しました。パブロフの「条件づけ」は、「古典的条件づけ」と呼ばれましたが、やはり「学習」に関する研究ではなく消化という「生理」に関する実験でした。

**■　「オペラント条件付け」**

ファン・トレーニングは、もうひとつの「条件づけ」から考えられました。「学習」の可能性を見つけたオペラント条件づけです。

1900 年代のはじめごろ、‘オペランド　’あるいは‘道具的’と呼ばれる条件づけが、アメリカの心理学者Ｅ．Ｌ．ソーンディケによって研究され始めました。数多くの学者が、その後に続きましたが、やはりアメリカの心理学者であるＢ．Ｆ．スキナーが最も有名でしょう。

ハトを用いて使われた、彼の考案した実験装置は「スキナー箱」と呼ばれました。スキナー箱の中には、ハトが入れられます。その前には、２色の板が置かれ、どちらかをつつくと、餌がもらえるようになっています。もし、別の方をつつくと、餌はもらえません。

ハトは、正しい板をつつくことと、餌がもらえることを関連づけて学び、お腹が空くと、正しい板をつつくようになっていきました。

ここで、大切なのは、スキナー箱に入れられた動物が、板をつつく「行動」と「餌をもらえる」という結果を重ね合せ、期待して、学び、新しい行動を行ったり、今までの行動を変えたりすることです。

他にも、ネズミ（ラット）を用いた実験では、板をつつくのではなく、餌や水を得るためにレバーを押すよう教えられました。また、ネズミが迷路の中を走り、早く餌のところにたどり着く方法を考えられるのかといった実験も行われました。例えば、Ｔ字型の迷路で、ネズは左右どちらか一方向を選択することで餌を与えられ、逆方向へ進んだ場合は電気ショツクを与えることになっていました。

このような道具だてで、研究者は、ネズミに「選択すること」を教えこむことができます。

何回も、迷路を駆け抜けたネズミは、その回数に比例して正しい選択ができるようになりました。
ネズミは経験を通して「学習」ができたわけです。これらの、方法は「オペラント条件づけ」と呼ばれ、「動物の学習能力」について研究されたものです。ハトの場合も、ネズミの場合も、回数が多いほど、期待した結果に早くたどり着けるようになっていきました。
この一定条件の下で「えさを与えること」方法を用いて、動物にある種の行動を学ばせる「オペラント条件づけ」を基礎に、ファントレーニングは考えられました。

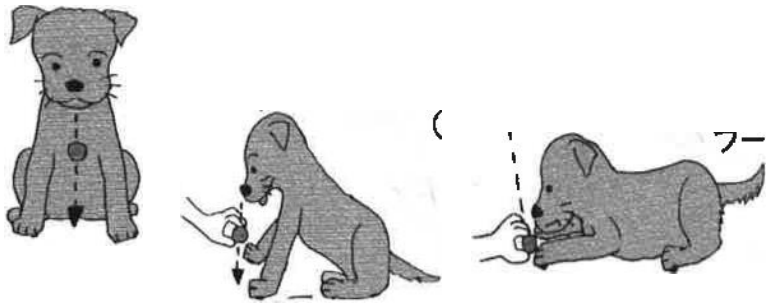
**●迷信が生んだ訓練方法と犬の「自主性」を引き出す方法**

（福）日本聴導犬協会が指導をあおいだ英国聴導犬協会は、世界で最も成功している聴導犬の育成協会です。そのトレーニング部長だったクレア・ゲストにファン・トレーニングについて話を聞きました。
「これまでの力による訓練というのは、ひとつの迷信によって創られたといってもいいでしょう。犬の祖先である狼のリーダーは、『体が最も大きく、力が強い固体だ』といった。そのために、犬をトレーニングする訓練士も自分の力を犬たちに誇示しなくてはならないと、考えたのでしょう。牙や強い脚力を持つ犬に勝てる人間は、そうそうはいません。時には、棒を持ち、チェーンを使い、犬に打ち勝つ方法を考え、大声で威嚇したりしました。しかし、それらは、ほとんどの場合、犬の『恐怖心』による方法であって、犬が自主的に学ぼうとする訓練方法ではないのです」
聴導犬を含む補助犬に、なぜ、ファン・トレーニングをするのか。
障がいのある「飼い主を守ろう」とする意欲を自主的に育て、どんな状況でも人に絶対に危害を加えないようにするためだともいいます。力によって訓練された犬たちは、自分よりも非力な人間には従おうとはしません。時には、犬自身が自分の力を示そうとする傾向が出てきます。
視覚が不自由だったり、肢体に障害者であれば、犬よりも動きが緩慢で力が弱い存在になります。そういった状況でも、飼い主に従順するには、力ではなく「良いことをすれば、誉められる。遊んでもらえる」といったファン・トレーニングで育てた訓練犬でなくてはならないのです。

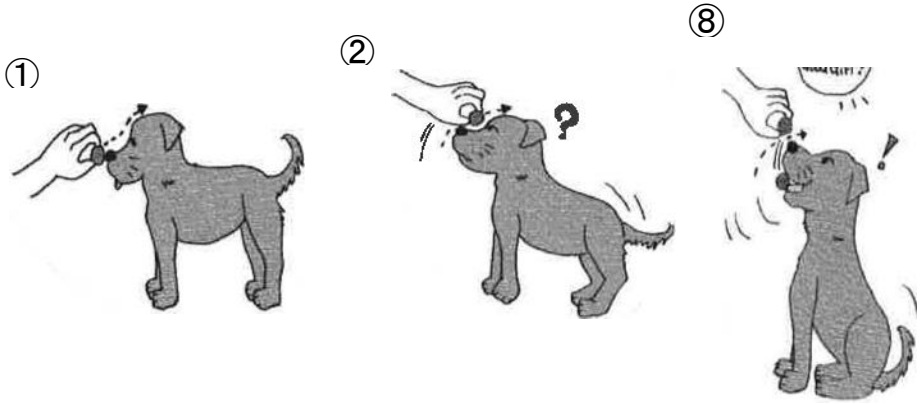


**●down（伏せ）**：なぜ、犬は伏せをしなくてはならないのでしょう？
答えは愛犬のためと、飼い主のための２つの理由があります。

「愛犬のため」というのは、例えば、飼い主が外で長話しをしている間、愛犬たちの疲労を防ぎ、リラックスしてもらうためです。
「飼い主のため」というのは、急な犬の動作を予防するためといえます。たとえば、ネコを見て犬が追いかけようとします。犬が立ったままだと、すぐに行動を起せますが、座ったり、伏せたりした状態だと、すぐに走り出すことができません。
伏せていた犬が動き出せば、飼い主の注意はそちらに向き、犬の急な動きを制御することができるのです。
座らせるのに、犬の腰を手で圧す方がいます。それでは、犬自身に考える時間を与えません。犬たちも考えています。こんなふうに。
「どうして、Sit といわれたら、腰を床につけるんだろう」
自分が座ると、ご褒美がもらえることで「座る」のは、いいことらしいと思えるようになる時間を与えてほしいのです。
自分で考えて納得すれば、犬たちは自主的に、もっともっと飼い主のいうことをきくようになります。
ひとつの動作を教えることは、「動作を覚えさせる」ことだけでなく、「この飼い主に従えば、間違いない」と信じさせる作業でもあるのです。
では、「伏せ」ですが、前足をひっぱって教える方法もあります。
しかし、今お話ししたように、犬が自分で考える時間が大事なのです。Sit と同じようにごほうびと動作を関係づけを行いしましょう。



みなさまの言葉に動作を合わせさせるより、動作に言葉をつけるようにしましょう。
まず、子犬の前に人が座り、犬の鼻先から頭の上の方に向かってフードを移動させます。子犬はごほうびがほしいので、初めの内は飛び跳ねたり、噛み付いたりしてごほうびをとろうとします。それでも与えないと、そのうちにあきらめて、ペタッとオシリを床につけることがあります。その瞬間「Sit（お座り)」という言葉を繰り返しながら、持っていたごほうびを与えます。
これを繰り返すと、子犬の中で
「オシリを床につければ、どうもごほうびがもらえるらしい」
「オシリを床につけることが、Sit ということらしい」
「Sit をすれば、ごほうびがもらえるらしい」
動作と言葉の関連性ができ、言葉だけで座れるようになります。



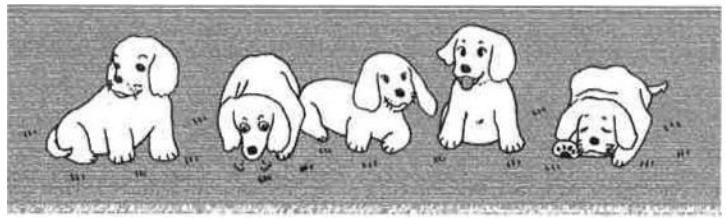

※「座れ」の注意１：ごほうびを子犬から遠く離すと、ジャンプの原因になります。鼻から頭にそわせてゆっくりと動かしましょう。
※「座れ」の注意２：ごほうびの握り方は、親指と人差し指との間にはさんで、子犬にみえやすいようにして行います。ただし、噛みぐせのある子の場合は、握りこぶしの中に入れて臭いでつります。
※「来い＆座れ」の注意点：１頭ずつで行います。できるようになったら、子犬同士が遊んでいる時や外でも行ってみましょう



## ■□■（５）早期トレーニング：パピークラスの目的■□■

子犬が人間の家族の中で、人間の手によって教育されなくてはならない理由はお話しいたしましたね。
早くに兄弟や母犬から離されたことで、子犬同士や群の成犬によって教育される時期を逃してしまった子は、犬社会にも人間社会にも属さない動物です。
そういった子は、仲間である犬といてもリラックスできませんし、人間のことも信じられないといった、緊張度の高い犬に育ってしまう傾向があります。

子犬の社会化を目的とする「パピークラス」は、子犬が「座れ、伏せ、待て」などの服従訓練を覚えるだけでなく、見知らぬ人や子犬同士が集まることで、人や犬への社会化をはかる場になります。初めのうちは子犬同士は、かみ合ったり、吠え合ったりすることで「へエ、こんな友達がいるんだな」「こんなことすると、相手はおこるんだな」といったことを覚え、犬付き合いの方法を知っていく過程も果たしています。通りかかる犬を見るたびに吠え掛かかったり、「犬に対して狂暴」な子であったり、逆に他の犬を怖がって道も歩けないような「臆病」な子も、飼い主にとってはとても問題になります。
他の犬に適度に親しみながら、いつでも精神的に安定していられる犬に育てるためには、犬同士の早期のいい出会いが必要なのです。
さあ、子犬同士にとって初めて対面する瞬間です。
まず、１頭ずつ子犬の性格判定を行います。その後で、「犬に対する攻撃性」がないと判断された子犬はリードをはずして、交流をさせます。もともと群れで生きてきた犬は、初めのうちは、犬仲間を怖がったり、嫌ったりしても、最終的には仲間といるのを好むようになるといわれています。



## ■一番初めに教えたい Come　(来い)と Sit(座れ)

① Come（来い/おいで）：一般的に「しつけ」と呼ばれる「服従訓練」の中で、初めに子犬に覚えさせたいのが「来い(Come)」です。
　リードが外れてしまった時、家から飛び出してしまった時など、子犬の命を交通事故から守るためにも、呼んだらすぐに戻って「来る」犬に育てたいものです。
　ただ、初めから「来い、来い」と繰り返しても子犬には、人間の言葉の意味がわかるわけではありません。「来い」といって、子犬が自分の方に来るのを期待してもそれは無理です。いろいろな方法がありますが、ここでは、家族で協力しあう方法をつかいます。
　まず、家の中でやってみましょう。家族全てがご褒美のごほうびを持っていてください。できれば、ポケットか小さなポシェットにいくつかごほうびをいれておきましょう。
　１人が子犬の首輪をつかんでおきます。初めは他の人との距離を２メートルくらいにし、片方の人が、子犬の名前を呼びます。声のトーンは高めでやさしく、明るい声にしてください。暗くて強い声では、おこられるのかと思って子犬が来ない時もあります。
　「こっちには楽しいことがいっぱいだよ」　というように、楽しげに呼んでください。犬が自分の方にきたら、首輪の辺をなぜながら、ごほうびを上げてください。次に反対の人が子犬の名を呼び、同じことを繰り返します。

※「来い」の注意点１：すぐにﾘｰﾄﾞにつながない。何回か放してから、つなぐこと。楽しいことがありそうだと、喜んできた子犬をすぐにリードにつなぐと、呼んでも来なくなります。子犬の気持ちの中では「呼ばれて、行ったら、つながれるから、行きたくない」と思うようになります。何回か来た子犬を放しては、呼び、来たらご褒美を与えることを繰り返し、「呼ばれたら、ご褒美がもらえるんだ」と子犬の頭の中にインプットさせるようにしましょう。

※「来い」の注意点２：声は楽しげに、明るく、高めにする。
　言語を持たない犬同士は、ボディランゲージや声のトーンから相
　手の感情を読み取ります。やさしい表情や笑顔で、楽しげな声のトーンなら「行ってみようかな」という気持ちになります。ご褒美を上げる時も笑顔を忘れずに。



※「来い」の注意点３：首輪の辺に手をやる。子犬を「来させた」後には③リードにつなぎますが、首輪を持たれるのを嫌う子がいます。寄って来た子犬にごほうびを与える前に、手を子犬の首輪のあたりに伸ばして、なぜてあげながらご褒美をあたえましょう。首輪をつかんでから、ごほうびをあげなさいという専門家もいますが、初めの内は首の辺をさわる後でごほうびを与えるようにしましょう。
※「来い」の注意点４：子犬にわかりやすい共通語を作る。名前を呼ぶ」、「笛を吹く」、「おもちゃを使う」など楽しめる合図を創りましょう。

② Sit（おすわり）：「座れ」「伏せ」「待て」は、犬のしつけにとって基礎となる動作です。遊んで興奮している時、注意が他に向いて人間の指示に集中できない時など、落ち着けるためにも服従訓練は不可欠です。「来い」をしつける時に、「座れ」も同時に行います。
　リードをつなげるにも、いったん、飼い主さんの足元で落ち着せるにも「座れ」の動作を「来い」の中に含んで教えるといいでしょう。
　さて、みまさまの家にやってきて間もない子犬にとって、「座れ」の命令であろうと「かぼちゃ」と言おうと、まったく意味不明です。「座れ、座れ」と何回も繰り返して、そのうちに怒りだす飼い主さんもいらっしやいますが、子犬には、言葉と動作が一致しないのです。